両丹日日新聞　平成20年）10月18日　土曜日

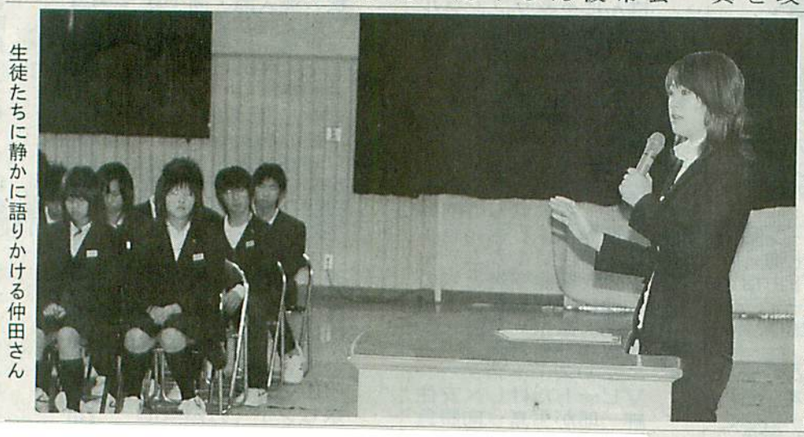
「特攻花」撮り続ける写真家
母校の大江中で講演
仲田千穂さん「戦争」を語りかける

戦時中、鹿児島県・喜界島で現地の人が出撃の特攻隊員に贈った「特攻花（テンニンギク）」を撮り続けている女性写真家、仲田千穂さん（26）＝大阪市在住＝の講演会が17日、母校の福知山市立大江中学校（大江町波美）であった。仲田さんは、特攻花の撮影を通じて知った戦争の悲惨さや平和の尊さなどを生徒たちに伝えた。

仲田さんは大江中、大江高校を経て、成安造形短大時代の19歳のころに特攻花を知り、現地で撮影するようになった。

仲田さんは特攻花の写真を映像で見せながら、花を初めて見た時「特攻隊員の魂がこもり、凛（りん）として力強く咲いていた」との印象を語った。

また、出撃前に撮影した特攻隊員の顔写真が笑顔で写っていたことに驚いた。


生徒たちに静かに語りかける仲田さん

きを覚えたことも話し、特攻隊員から聞いた話も紹介し、戦争があったことを「次に知らせていくのがわたしたち若者の役目」として、「わたしは特攻花を通じて戦争を知ったが、みなさんも自分のやりやすい方法で戦争について勉強してほしい」と呼びかけた。

気負いなく、生徒たちと同じ目線で話す仲田さんの講演に、生徒たちは静かに聴き入り、戦争について深く考えていた。

京都

平和願う思い一つ
特攻花 撮る意味訴え
大江中出身の写真家 母校で講演

特攻隊基地があった鹿児島県・喜界島に咲く「特攻花」（テンニンギク）を撮り続ける福知山市大江町出身の写真家仲田千穂さん（26）が十七日、母校の大江中で平和について講演した。

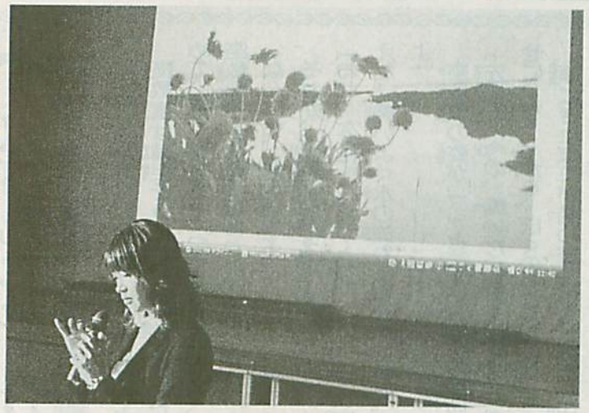
仲田さんは十九歳から毎年、基地の滑走路跡に群生する花を撮影。戦争体験者への取材もし、写真展や講演を各地で行っている。

講演で、仲田さんは元隊員の「なぜ生き残ったのか」という悩みを聞き、「胸を打たれたと同時に、伝えないといけないと思った」と写真を撮る理由を語った。最後に「花から戦争を見るというのは、入りやすかった。大江でも戦争の話は聞ける。自分のやりやすい方法で戦争を勉強して」と後輩に呼びかけた。（久保田昌洋）

後輩を前に「特攻花」と平和について語る仲田さん（福知山市大江町・大江中）

毎日新聞　〔第3種郵便物認可〕

「若者が平和つなごう」
「特攻花」撮影に託す思い語る
写真家 仲田千穂さん


自ら撮影した「特攻花」を紹介する仲田さん＝福知山市立大江中で

出撃前の特攻隊員が滑走路に置いた花の種が周辺で自生したとされる「特攻花」（テンニンギク）を撮り続ける写真家、仲田千穂さん（26）＝大阪市＝が17日、母校の福知山市立大江中（大江町波美、久木久代校長、137人）で初めて講演した。仲田さんは「平和を守るため、戦争の話を続ける」という元特攻隊員の語り部の言葉を紹介しながら、「その思いを次につなげるのが私たち若者の役割」と語りかけた。【熊谷仁志】

母校の福知山・大江中で初講演

仲田さんは大江中、府立大江高卒。短大在学中の19歳の時、沖縄方面への特攻の中継基地だった喜界島（鹿児島）の「特攻花」を知る。島の女性が特攻隊員に贈ったテンニンギクを地元の人たちが平和の願いを込め、「特攻菊」と呼んでいた。

仲田さんは島を訪問し、花を目にした時、「凛とした姿」に心打たれたという。

その後、仲田さんは島にひんぱんに通い、地元の人たちとも交流を深め、3年前には写真集「特攻花」を出版している。

仲田さんは講演で、特攻隊員の遺書を読み上げながら、若くして命を捨てざるを得なった隊員の思いを伝えた。また、自ら撮影した「特攻花」などをスライドで紹介した。

仲田さんは「プリクラを撮りに行った福知山が都会に見えた」と中学生時代の思い出も語りながら、「チャンスはいっぱいある。まず、毎日を精いっぱい生きてほしい」と後輩を励ました。

市民病院で写真展示替え

日報連福知山支部（加藤進支部長）は17日、福知山市厚中町の市民病院1階に飾っている写真の展示替えを行い、新たに19点を展示した＝写真。

会員の作品展示は「患者さんの癒やしになれば」と国立病院時代から続けており、展示替えは6月以来今年3回目。

京都・常寂光寺の紅葉、雪景色のかやぶき民家（南丹市美山町）